

第10回

能代おもしろ映画祭り

2026.10.3(土) 能代市文化会館 中ホール 開場 10:00



日活名画・話題作4作品 一挙上映

すべての写真は(C)日活

ギターを持った渡り鳥 10:30~11:47(77分) カラー

警察日記 13:00~14:51(111分) 白黒



愛と死をみつめて 15:10~17:08(118分) 白黒

落語娘 17:30~19:19(109分) カラー



入場料：1本700円(前売り600円)
全席自由 ※高校生以下は無料 入替あり

<チケット販売所>

能代市文化会館/一長堂/市民おもしろ塾/道の駅ニツ井

主 催：能代おもしろ映画祭り実行委員会

後 援：能代市教育委員会/能代市芸術文化協会/市民おもしろ塾

問合せ先TEL：実行委員会事務局 080-4131-3634

<本催しには能代市市民まちづくり活動支援事業補助金を活用>

上映映画のご紹介



10:30～11:47(77分)

ギターを持った渡り鳥 [1959年 日活] (カラー)

監督 斎藤武市 [出演者] 小林旭、浅丘ルリ子、金子信雄、宍戸錠、渡辺美佐子

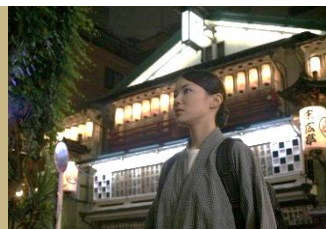
過去を捨て、ギターを背負ってあてのない旅を続ける渡り鳥の伸次（元刑事）は、夕映えの美しい港町（函館）に流れ着いた。ある夜、伸次はバーで不良外人たちに絡まれていた流しのギタリストを救う。この喧嘩の腕前を見込まれた伸次は、地元の顔役である秋津親分に引き合わされる。秋津は娯楽センターを拡張するため、強制的に土地を買収しようと企む悪党だった。伸次は秋津から用心棒にならないかと誘われるが、それを一蹴する。その後、伸次は別の暴力団との抗争に巻き込まれていく。ギターをかき鳴らし、鉄拳と銃と唄で悪党の野望を粉碎していく伸次。事件が解決した後、彼は再びギターを背負い、次の街へと風のような旅を続けていく。小林旭主演の痛快無国籍アクション映画の傑作。浅丘ルリ子、宍戸錠も熱演！この後に7作が続く人気シリーズ。

13:00～14:51(111分)

警察日記 [1954年 日活] (白黒)

監督 久松静児 [出演者] 森繁久彌、伊藤雄之助、三国連太郎、殿山泰司、左ト全、杉村春子、二木てるみ

戦後間もない磐梯山麓の小さな町の警察署を舞台にして、その町に暮らす人々の引き起こす様々なエピソードをスケッチ風に描く久松静児監督作品。中年のお人好しの吉井巡査が捨て子の姉妹の世話をしたり、若い花川巡査がめぐり周旋屋にひっかけられた娘を出発寸前に押さえ、その娘に淡い恋心を抱いたり、またこの周旋屋の女をめぐる所長が職安の連中とやり合ったり。その他、万引きと無銭飲食の女の哀しい話、あるいは気のいい馬車屋の話、捨て子が料理屋の女将に引き取られたあと実の母が現れるといったエピソードが盛り込まれた人情喜劇の佳編。若き宍戸錠、三国連太郎、二木てるみなどの好演が印象的である。また森繁久彌を軸に、脇を固める厚みのある男優人、女優陣の演技は圧巻である。原作者は、秋田出身の伊藤永之介。



15:10～17:08(118分)

愛と死をみつめて [1964年 日活] (白黒)

監督 斎藤武市 [出演者] 浜田光夫、吉永小百合、笠智衆、原恵子、内藤武敏

誠が道子に会ったのは、誠の入院の時であった。その日から誠は道子に好感をもった。一見健康そうな道子は、誠が東京の大学に入って二年目に再会したときも、軟骨肉腫で病院生活を送っていた。二人の文通は続けられ、道子の不安は、誠の手紙や見舞によって力づけられていた。その後、本格的な闘病生活に入り、不治の病と聞かされた道子は、誠に別れの手紙を出すと、誠はかけつけ、くじける道子の気持を責めた。道子も誠の誠実な愛情に号泣。一方主治医は、道子の生命を守るために、顔半分がつぶれる大手術が必要だと言い、道子の動揺は激しかった。だが誠の愛情の大きさに、ついに道子は決意した。術後の容態は順調で、道子は日増しに明るくなっていった。だがある日、道子は健康な右半分に、骨が出て来たのに気づき、愕然とした。再びの手術半ば、道子はこの世を去った。日記帳には誠との楽しい生活を夢みた、数々の青春の悲しみと喜びが記してあった。往復書簡は、160万部を超えるベストセラーに。

17:30～19:19(109分)

落語娘 [2008年 日活] (カラー)

監督 中原俊 [出演者] ミムラ、津川雅彦、益岡徹、伊藤かずえ

叔父の影響で12歳の時に落語に目覚めた香須美は、プロの落語家を目指しひたすら落語に励んでいた。大学の落研で学生コンクールを総なめにして、古典の名手・三松屋柿紅の門を叩いたが、入門を断られてしまう。そんな香須美は、三々亭平佐に拾われて、なんとか前座になるのであった。しかし、平左は業界でも礼付きの問題児で、一度も稽古をつけてくれないばかりか、不祥事を起こしたり、遊びでこさえた借金を押し付けてくる始末。ついに寄席にも出入り禁止状態に…。そんな時、香須美は落研の後輩でスポーツ紙の記者をしている清水から、平左が「緋扇長屋」に挑むという話を聞く。実はこの噂は、関わった噺家が次々と怪死を遂げたために封印された、曰くつき呪われた落語だった。“津川雅彦もミムラもよくここまで落語を演じられたものだ！”とその役者魂に感嘆!! 見て本当によかった思える作品!!